

北九州・京築・筑豊地域における社会福祉施設のボランティア受け入れの実態と福祉系大学生のボランティア意識に関する一考察

—2006年度及び2007年度の調査結果の比較検討を通じて—

本郷 秀和*・松岡 佐智**

要旨 本論文では、筆者らが2006年度において実施した福岡県立大学周辺地域（北九州・筑豊・京築）の社会福祉施設のボランティア受け入れに対する意向、活動実態等に関する調査結果と2007年度に実施した福岡県立大学人間社会学部社会福祉学科に所属する学生の福祉ボランティア活動の実態及びニーズ、活動を阻害する要因等を把握することを目的とした調査結果とを比較し、福祉ボランティア活動を希望する大学生への支援のポイントを模索することを研究目的とした。

比較検討の結果、(1)福祉ボランティアを希望する学生は、マナーや基本的礼儀を身に付ける必要があること、(2)学生・施設ともに福祉ボランティア活動により利用者とのコミュニケーションを促進させたいこと、(3)社会福祉施設側は、ボランティアのニーズを踏まえ、ボランティア担当者の資質を向上させるとともに、リスクに備える体制整備を図ること、(4)福祉ボランティアには、施設と地域の関わりを促進させる働きが期待されていること、などが明らかになってきた。

キーワード 福祉ボランティア、社会福祉施設、社会福祉学科大学生

I はじめに

1 研究の背景と目的

本研究では、主に福岡県立大学周辺地域（北九州・京築・筑豊）の社会福祉施設のボランティア受け入れの実態や意向等と（2006年度に実施した調査結果を用いる）、福岡県立大学人間社会学部社会福祉学科の在学生の福祉ボラン

ティアに対する意向や活動の現状を把握した結果（2007年度に実施した調査結果を用いる）との比較検討を試みることで、福祉ボランティアの活動ニーズを持つ大学生に対する支援の必要性・ポイントを模索したいと考えている（学生と施設側の両者の意見・認識の相違点を顕在化させることは、学生と社会福祉施設の両者が福祉ボランティア活動を媒介として円滑な関係を

* 福岡県立大学人間社会学部社会福祉学科 准教授

** 福岡県立大学人間社会学部社会福祉学科 助手

形成していくための要因を明らかにすることにつながると考えたからである。)

施設側の意向と学生側の意向のどちらを重要視すべきかという問いに対しては、筆者は基本的には施設側の意向を十分に踏まえなければならないという考えを持っている。なぜなら、社会福祉施設は法制度を設置根拠として、適正に運営を実施する責務が存在するからである。もちろん、社会福祉施設側が福祉ボランティアを無償で利用できる職務補助者として捉えるような見方があれば、それを正していく必要もある。と同時に、福祉ボランティア活動を希望する学生自身も活動の意味を正しく理解することが必要である。

2 研究方法とプロセス

本論文の研究方法・プロセスは、はじめに福祉を学ぶ大学生にとっての福祉ボランティア活動の必要性・意義について、先行研究を参考に筆者の意見を整理したうえで、①2006年度に実施した北九州・京築・筑豊地域の社会福祉施設に対する福祉ボランティア受け入れに関するアンケート調査（以下、2006年度調査）の結果整理、②2007年度に実施した北九州・京築・筑豊地域の福岡県立大学社会福祉学科の在学生（1年～4年生）に対するボランティアに関する意識調査（以下、2007年度調査）の結果整理、③①と②との比較検討（紙幅の都合上で両調査の類似する調査項目の中で特に傾向の違いがみられたものを取り上げた）、という手順をとっている。なお、比較検討の対象とする両調査の概要を次に示す（両調査は、平成18～20年度、福岡県立大学研究奨励交付金による助成研究[研究代表：本郷秀和]である）。※本調査の各項目で示す表については、回答者が存在しなかつ

た選択肢は削除・再整理し、統計処理はSSRI「エクセル統計2006」を使用している。

3 2006年度調査および2007年度調査の概要

(1) 2006年度調査概要

- ① 調査目的：北九州・京築・筑豊地域（福岡県）における社会福祉施設におけるボランティア受け入れに関する意向及びニーズ・活動状況等の把握。
- ② 調査対象及び抽出方法
 - (i) 調査対象：北九州・京築・筑豊地域（福岡県）における社会福祉施設
※各地域に含まれる市町村は、福岡県社会福祉協議会発行、『福岡県社会福祉施設等名簿』、2005年の分類に基づいている。
 - (ii) 抽出方法：「福岡県社会福祉施設等名簿」（福岡県社会福祉協議会発行、2005年）より、北九州・京築・筑豊地域の社会福祉施設を全数抽出。
- ③ 調査方法：郵送調査（アンケート調査）
- ④ 調査期間：2006年（平成18）年5月26日（金）～6月30日（金）
- ⑤ 地区別回収数・回収率：(i)北九州：96/202（回収数/配布数）、回収率47.5%、(ii)京築：32/66（回収数/配布数）、回収率48.5%、(iii)筑豊：109/230（回収数/配布数）、回収率47.4%、(iv)地区不明：8枚、(v)全体：245/486（回収数/配布数）、回収率50.4%

(2) 2007年度調査概要

① 調査目的

福岡県立大学社会福祉学科学生の(i)福祉ボランティア経験と現状、(ii)福祉ボランティア活動に対する意欲・意識、(iii)福祉ボランティア活動の阻害要因、などを明らかにする。

② 調査対象及び抽出方法

2007年度における福岡県立大学社会福祉学科所属の1～4年生

③ 調査方法

1年生から3年生に対しては、アンケート票を用いた集合調査を行ったが、4年生については、各ゼミの担当教員にアンケート用紙を渡し調査依頼した。

④ 調査期間

- (i) 1年生：2007年7月9日
- (ii) 2年生：2007年7月24日
- (iii) 3年生：2007年6月26日
- (iv) 4年生：2007年7月9日～8月8日

⑤ 学年別の回収数・回収率

- (i) 1年生：回収数55/59（回収率93.2%）
- (ii) 2年生：回収数55/61（回収率90.2%）
- (iii) 3年生：回収数58/61（回収率95.1%）
- (iv) 4年生：回収数37/55（回収率67.3%）
- (v) 全体：回収数205/236（回収率86.9%）

Ⅱ 福祉を学ぶ大学生における福祉ボランティア活動の意義

1. 大学内での現場教育の限界

現在、社会福祉士を養成する大学では、学生が福祉専門職を志すにあたって基礎となる講義、演習、実習（社会福祉援助技術現場実習）がカリキュラム化されている。中でも、特に実習に関しては、当然のことながら一定の意義・教育効果がみられるものの⁽¹⁾、社会福祉士養成にともなう実習時間（180時間）では、ソーシャルワークあるいは相談援助の実習としては、さほど多くないように思える。また、カリキュラム化された実習では、学生（実習生）は実習指導者との上下関係的な関わりで利用者支援等

に取り組みやすいとも予想される。これに関して、一部の大学の福祉系学部・学科では、既に自主的な実習や福祉ボランティア活動の推奨などに取り組んでいるが、あくまでも講義による知識の習得と演習による基礎的スキルの獲得、実習による福祉現場の概要理解を大学の主要な役割としているようである。また、実際の福祉サービス利用者への支援能力の獲得は、学生が社会福祉施設等に就職した後に、経験を積むことで施設側が担うという役割分担が行われているとも考えられる。

2. 福祉ボランティアの捉え方と学生にとっての活動の意義

(1) ボランティアの捉え方

我が国におけるボランティアの定義については、論者により若干の定義の相違もみられている。そこでボランティアの意味を若干ここで整理しておきたい。ボランティアの性質としては、①自発性（自ら主体的に福祉活動に取り組む）、②公共性（生活上の困難を抱えている人々に対する支援）、③連帯性（関係者と共に支えあいながら取り組む）、④無償性（経済的な報酬を得ない）、⑤市民性（学生であっても市民として活動する）を挙げることができる⁽²⁾。しかし、④の無償性については、経済的価値では図れない報酬（利用者からの感謝の言葉等による精神的な満足感や活動を通じた知識の習得等）は活動者にとっての大きな報酬としての意味を持つことも留意しておきたい。また、近年ではボランティアの活動場所・対象者も多岐に渡っているため、本論で意味する「福祉ボランティア」とは、社会福祉施設で活動するボランティアとして限定的に捉えることにする。

(2) 福祉ボランティアの特質と学生にとって
考えられる意義

福祉ボランティアの特質について、三本松政之氏は「福祉は人々の生活を支える役割を持つものである。だが福祉領域のボランティアは、生きることの現場との関わりが強く、そのあり方も多様である。それぞれの固有の生き方に関わるという意味で臨床性を有する。」と説明している⁽³⁾。このような説明からも、福祉ボランティア活動では、福祉サービスの利用者の生活に関わる直接的支援活動が中心になるといえる。この意味では、福祉専門職を志す大学生にとっては、臨床場面（利用者とのコミュニケーションや生活状況の把握等）を経験できる活動の場として、社会福祉施設を捉えていることも予想される。

また、福祉を学ぶ大学生の福祉ボランティア活動の意義を、知識やスキルを習得する観点から捉えた場合では、①福祉サービス利用者の状況理解、②福祉従事者の役割理解、③個別に応じた支援方法の理解、④地域との連携の必要性に関する理解、⑤社会福祉施設が抱える課題の理解、⑥将来の進路選択に資する参考、などという思いから活動に取り組むことが推測される⁽⁴⁾。但し、その前提として福祉ボランティア活動者には、人間同士のたすけあいの精神を前提とした福祉ボランティアの理解・モラルと責任感が必要である。

なお、ボランティア活動と大学の専攻との関連では、日米とも「社会福祉」と「教育」の分野の大学生の活動に意欲的であることが明らかにされている⁽⁵⁾。

Ⅲ 福祉ボランティアに関する大学生の意識・活動状況と北九州・京築・筑豊地域の社会福祉施設の状況

1. 2007年度調査における回答者（学生）の状況

(1) 回答者の性別－男性37名（18.0%）、女性168名（82.0%）

(2) 居住地域－福岡市11名（5.4%）、北九州市20名（9.8%）、飯塚市5名（2.4%）、田川市郡143名（69.7%）、その他26名（12.7%）

(3) 現在の学年と福祉に関するボランティア経験

学年別にみた福祉施設・機関等でのボランティア経験の有無について、「経験がない」1年生が66.0%と他の学年と比較して少ないことがわかる（表1のクロス表の残差分析結果では1年生の「ボランティア経験はない」が1%水準で有意に高く、逆に「過去または現在にボランティア活動をしている」では1%水準で有意に低い）。また、3、4年生の両学年ともに「ボランティア経験はない」が有意に低く（3年生は1%水準、4年生は5%水準で有意）、逆に「経験がある」では有意に高くなっている（3年生は1%水準、4年生は5%水準で有意）。つまり、3年生が最も活動に取り組んでいるが、全体的には学年が上昇するほど高くなりやすいことも推測される。

(4) 日常生活上の主要な移動手段とボランティア先までの移動許容時間

回答者（学生）の日常生活上の主な移動手段

表1 学年別にみた福祉施設・機関等でのボランティア経験の有無 (SA)

設問項目	①ボランティア経験なし(%)	②過去・現在に経験あり(%)	合計 (%)
①1年	33(66.0、▲)	17(34.0、▼)	50(25.8)
②2年	25(48.1)	27(51.9)	52(26.8)
③3年	11(19.6、▼)	45(80.4、▲)	56(28.9)
④4年	8(22.2、▽)	28(77.8、△)	36(14.4)
合計 (%)	77(39.7)	117(60.3)	194(100)

$X^2=29.9779$, $df=3$, $p<0.01$. (▲: 1%水準有意に高い, △: 5%水準有意に高い, ▼: 1%水準有意に低い, ▽: 5%水準有意に低い) ※合計(%)は小数点第2位を四捨五入

表2 日常の交通手段とボランティア先までの移動許容時間

設問項目	①15分以内	②30分以内	③1時間以内	④その他	合計(%)
①徒歩	2(7.7)	15(57.7)	8(30.8)	1(3.8)	2(0.1)
②自転車	7(7.1)	59(60.2)	28(28.6)	4(4.1)	98(48.5)
③バイク	0(0.0)	5(55.6)	1(11.1)	3(33.3)	9(4.5)
④自家用車	7(17.9)	16(41.0)	16(41.0)	0(0.0)	39(19.3)
⑤バス・鉄道	1(3.3)	21(70.0)	7(23.3)	1(3.3)	30(14.9)
合計 (%)	17(8.4)	116(57.4)	60(29.7)	9(4.5)	202(100)

を表2で示す。結果、「自転車」48.5%が最も多く、次いで「自家用車」19.3%、「バス・鉄道」14.9%の順である。ボランティア活動に伴う許容移動時間は、自転車では「30分以内」60.2%が最も多く、「1時間以内」28.6%の順であるが、「自家用車」についても「30分以内」「1時間以内」が各々41.0%を占めている。一方、「徒歩」では「30分以内」57.7%が最も多い。総じて、学生の過半数は移動時間を「30分以内」が望ましいと考えている。

(5) アルバイトの重要性、福祉ボランティア活動動機と希望内容

現在アルバイトをしている学生のうち、「アルバイト無しでも生活できる」と回答した者は、「生活にアルバイトが不可欠」と回答した者よりも、福祉ボランティア活動に積極的に取り組んでいることが読み取れる(表3、なお、

別の設問ではボランティア活動の阻害要因として「アルバイトのためにボランティア活動ができない」と回答した学生は30.8% [N=204, SA]と最も多く、次いで「大学の講義が忙しい」16.2%の順であった。「その他」19%を除く)。

つまり、アルバイトで生活を維持する必要性が高いほど、福祉ボランティア活動に取り組みにくくなることが推測されるのである。したがって、アルバイト学生に対する経済的支援が福祉ボランティア活動の参加促進を可能にするとも考えられよう。

一方、学生が福祉ボランティアに取り組む活動動機としては、「自分の将来を決める判断材料として」45.1%が最も多く、「技術が身に付く」29.4%、「知識が身に付く」19.6%の順であった(SA, N=205)。これは、学生の活動動機が他人に貢献するという意識よりも、むしろ学生自身に有益であるため、福祉ボランティアに

表3 アルバイトに対する認識と福祉ボランティアの活動状況

設問項目	現在の福祉ボランティア活動状況		合計 (%)
	①している	②活動していない	
①アルバイトなしで生活できる	18(42.9)	24(57.1)	42(30.7)
②生活にアルバイトが不可欠	25(26.3)	70(73.7)	95(69.3)
合計	43(31.4)	94(68.6)	137(100)

$p < 0.05$ (fisher's exact testによる片側検定)

取り組もうとしていることも推測される。

他方、大学生が最も希望する福祉ボランティアの活動内容としては、「イベント・行事」27.8%が最も多く、次いで「相談援助」23.4%、「介護・保育」22.0%、「利用者の話し相手」20.5%の順となった(SA、N=205)。これらの共通項としては、やはり「コミュニケーション」が重要なキーワードになると考えられる。なお、「相談援助」については、社会福祉士の主要業務であることから、将来社会福祉士を志す学生にとっては、福祉ボランティア活動の活動動機になりやすいことも推測される。

2. 2006年度調査における回答者(社会福祉施設)の状況

(1) 社会福祉施設(回答者)の施設概要(N=240)

高齢者関連施設: 110 (45.8%)、精神障害者児関連施設: 9 (3.8%)、知的障害者関連施設 52 (21.7%)、身体障害者関連施設 21 (8.8%)、児童関連施設 12 (5.0%)、社会福祉協議会 24 (10.0%)、その他(婦人相談所等) 12 (5.0%)

(2) 施設別にみたボランティア募集活動の有無と期待する役割・考え方

施設別にみた現在のボランティア募集活動の実施状況を表4で示す。結果、社会福祉協議会(地域福祉の推進機関)が83.3%で最も高いが、

他の施設は全て半数以下である(「その他」を除く)。なお、クロス表の残差分析の結果では、児童関連施設の「実施している」と社会福祉協議会の「実施していない」で有意に低く(両方とも1%水準)、逆に児童関連施設の「実施していない」と社会福祉協議会の「実施している」で有意に高くなっていった(両方とも1%水準)。つまり、施設種別によって募集活動の状況が異なることがわかるのである。

一方、施設側が最もボランティアに期待する役割としては、「利用者の話し相手」43.4%が最多であり、次いで「業務の手伝い」23.3%、「施設への意見を得られる、風通しが良くなる」9.6%の順となった(SA、N=219)。これに関しては、別の質問で「ボランティアに最も身に付けて欲しい技術」について尋ねていたが、「コミュニケーションの技術」を挙げた社会福祉施設が84.7%(SA、N=222)にもものぼっていた。

ボランティアが希望する活動に対する施設側の受け止め方・姿勢としては、「ボランティアの意見を尊重しながら、可能な限り職員が割り当てる」51.1%が最も多く、次いで「職員の希望を尊重しながら、可能な限りボランティアの意見も尊重する」23.1%の順になった(「利用者の意見尊重」は13.5%。SA、N=229)。この結果から、多くの社会福祉施設は、ボランティアに利用者とのコミュニケーション役を期待しつつも、ボランティア自身の希望が反映さ

表 4 施設概要とボランティア募集活動の有無

施設種別	ボランティア募集活動の有無		合計(%)
	①実施している	②実施していない	
①高齢者関連施設	34(31.2%)	75(68.8%)	109(100)
②精神障害者児関連施設	4(44.4%)	5(55.6%)	9(100)
③知的障害者児関連施設	23(45.1%)	28(54.9%)	51(100)
④身体障害者児関連施設	10(47.6%)	11(52.4%)	21(100)
⑤児童関連施設	1(8.3%)▼	11(91.7%)▲	12(100)
⑥社会福祉協議会	20(83.3%)▲	4(16.7%)▼	24(100)
⑦その他	6(50.0%)	6(50.0%)	12(100)
合計	98(41.2)	140(58.8%)	238(100)

$X^2=19.6424$, $df=5$, $p<0.01$ (▲：1%水準有意に高い、▼：1%水準有意に低い、)

れるような活動内容も考慮していることが推測できる。これについては、まず福祉を学ぶ大学生が対人援助に関わる基本的なマナーや倫理を身に付けておく必要があると理解することもできる（特に基本的な礼儀やマナーは、大学が学生に対して助言すべき内容としても考えられる）。

(3) 施設別にみた現在の大学生の福祉ボランティア活動（存在）状況とボランティアの紹介経路、学生ボランティア受け入れの可能人数・姿勢

施設別にみた福祉ボランティアに取り組む大学生の存在状況は「存在している」が全体の23.7%に留まった。活動している施設の内訳をみると、その割合が高いものから「社会福祉協議会」36.8%、「精神障害者児関連施設」33.3%、「児童関連施設」30.0%の順であった（SA、N=236）。また、最も多いボランティアの紹介経路では、「希望者自ら」が38.9%で最も多く、次いで「学校関係者からの紹介」20.8%の順になっていた（SA、N=226）。また、社会福祉施設側が学生ボランティアを受け

入れ可能な1日の人数については、「2-3名」59.6%が最も多くなっており、1週間単位では「1-2日が適度」36.9%、「3-4日が適度」21.5%の順であった（SA、N=233）。

なお、大学時のボランティア活動が「採用要因になる」と回答した社会福祉施設は45.7%で最も多く、「思わない」29.5%を上回る結果になった（「わからない」は24.8%、SA、N=234）。このような結果を学生に伝えていくことは、福祉従事者を目指す学生にとっても福祉ボランティア活動の更なる動機になるとも考えられる。加えて、福祉ボランティア活動を希望する福祉系大学生に対しては、85.9%の社会福祉施設が「歓迎したい」と回答していた（SA、N=234）。

IV. 共通的設問の回答傾向（回答傾向の違いが見られた設問を中心に）

1. 学生が参加したい分野と施設別にみた社会福祉施設の受け入れ状況

学生が福祉ボランティアとして最も参加したい分野は「こども関係」27.3%、「高齢者関係」

24.4%、「病院」23.4%、「障害者関係」12.7%、「社会福祉協議会」9.3%の順であった（SA、N=205）。これに対して、表5で示した社会福祉施設側のボランティア受け入れ状況からは、児童関連施設（障害児を除く）の75.0%がボランティアを受け入れていたが、他の施設と比較すると最も低い割合を示した（施設数も少ないため、活動希望者にとっては狭き門になる可能性もある）。しかしながら、社会福祉施設全体では、89.1%もの施設がボランティアを受け入れている。

表5の②から④の障害者関連施設の結果からは、「ボランティアを受入れている」が全て85%以上である反面、別の調査項目の結果では、障害者関連施設でボランティアを最も希望する学生（活動に取り組む場合）は12.7%に留まっていた（SA、N=205）。また、「高齢者関連施設」の90.7%が福祉ボランティアを受入れていることから、高齢者関連施設でボランティアを希望する学生にとっては、実現しやすい施設であることが考えられる（社会福祉協議会でも同様のことがいえる）。総じて、調査対象地域の多くの社会福祉施設は、福祉ボランティアに対して、門戸を広く開いている状況が

うかがえる。

2. 福祉ボランティアに求められる態度

表6で示したとおり、学生側が認識している「ボランティアが最も持つべき態度」(SA)では「積極性」61.5% (N=205)が最も多いが、施設側では17.9% (N=223)に留まっており、両者の意識に大きな隔たり（43.6%の差）がみられている。施設側は「明るさ」を求める場合が48.0%と最も多いが、学生側の認識での「明るさ」は23.4%となっており、両者に24.6%の差が生じている。このような施設側の認識も、学生に伝えておくべき事柄であろう。

以上に加えて、「最も好ましくないボランティア像」について尋ねたところ、学生・施設ともに「マナーが守れない人」（学生42.6%、施設50.7%）が最も多く、次いで「自分勝手な人」（学生36.8%、施設24.7%）の順になっていた。総じて、ボランティア活動者は「明るさ」と「積極性」を備えると同時に、一般的なマナーを保持し、他人との協調性を持てる人物が望ましいと理解することができる。

表5 施設概要とボランティアの受け入れ状況

施設概要		ボランティア受け入れ状況		
		(3)現在のボランティア受け入れ状況 (SA)		
		①受け入れている	②受け入れていない	合計 (%)
(1) 施設概要 (SA)	①児童関連施設	9(75.0)	3(25.0)	12(100)
	②精神障害者児関連施設	8(88.9)	1(11.1)	9(100)
	③知的障害者児関連施設	48(92.3)	4(7.7)	52(100)
	④身体障害者児関連施設	18(85.7)	3(14.3)	21(100)
	⑤高齢者関連施設	98(90.7)	10(9.3)	108(100)
	⑥社会福祉協議会	21(87.5)	3(12.5)	24(100)
	⑦その他	10(83.3)	2(16.7)	12(100)
合計		212(89.1)	26(10.9)	238(100)

表6 福祉施設等でのボランティアが最も持つべき態度

〈学生側〉福祉施設等でのボランティアが最も持つべき態度 (SA、サンプル数205/205)			〈施設側〉ボランティアに最も身につけて欲しい態度 (SA、サンプル数223/245)		差 (%)
選択肢	度数	%	度数	%	
①明るさ	48	23.4	107	48.0	-24.6
②謙虚さ	9	4.4	24	10.8	+6.4
③積極性	126	61.5	40	17.9	+43.6
④まじめさ	19	9.3	36	16.1	+6.8
⑤その他	3	1.5	16	7.2	+5.7
合計	205	100	223	100	

3. 福祉ボランティアを巡るトラブルに対する考え方と影響、活動時期・謝礼等

(1) トラブルに対する考え方と学生の不安

学生側が認識している「ボランティアと利用者とのトラブル」(SA、N=204)については、「時々生じると思う」55.9%が最も多く、次いで「わからない」23.0%、「殆ど生じないと思う」11.8%の順であった。これに対して、社会福祉施設側の「ボランティアと利用者とのトラブルの発生状況」(SA、N=227)では、「殆ど生じない」46.3%が最も多く、次いで「全くない」33.9%、「時々生じる」11.5%の順となっており、両者の認識に違いがみられた。一方、「ボランティアと施設とのトラブル発生状況」に対する認識では、学生側は「時々生じると思う」52.5%が最も多く、次いで「わからない」21.6%の順となったが(SA、N=204)、施設側では「殆ど生じない」45.1%が最も多く、次いで「全くない」33.9%の順であった(SA、N=226)。

以上のことから、学生がイメージしているほど、利用者や職員と福祉ボランティア活動者の間には、トラブルが生じていないと考えることができる。つまり、利用者や職員とのトラブル

を気にして福祉ボランティア活動に踏み出せない学生に対しては、施設側の認識(事実)を積極的に伝えていく必要も考えられるのではないだろうか。

また、福祉ボランティアに対する学生の不安内容(SA、N=203)については、「利用者とのコミュニケーション」38.9%、「知識不足」25.1%、「技術不足」25.1%、「職員とのコミュニケーション」7.9%などという結果になった。つまり、コミュニケーションが学生にとって大きな不安材料になっているのである。なお、佐々木正道氏による調査では、わが国の大学生のボランティア活動体験者は、「活動に関する知識や技術を持っていない」ことがボランティア活動の障害になると答えた割合がアメリカの4倍に上っているという報告もある⁽⁶⁾。

(2) ボランティアの影響

ボランティアが利用者を与える好ましい影響について、学生および施設側に質問した(SA)。結果、学生側の回答(SA、N=204)では、ボランティアは利用者「好ましい影響を与えると思う」34.3%、「どちらでもない」33.3%、「わからない」32.4%とほぼ三分された。しかし、

施設側の意識では「好ましい影響（いい刺激）を受けていると思う」77.2%が最も多く、次いで「分からない」18.9%という結果であった（SA、N=228）。つまり、多くのボランティアは利用者にとって有益な存在となっているが、そのことを学生自身はあまり認識していないことが考えられるのである。

また、ボランティアが施設にもたらすと考えられる好ましい影響は、学生側（N=204）では「地域とのつながりが広がる」34.8%、「新しい知識・考え方が得られる」21.1%、「将来の福祉従事者の教育ができる」18.1%の順になった。一方、施設側の捉え方をみると、「地域とのつながりができる」60.4%が最も多く、「施設の透明性が向上する」13.2%（学生側では6.9%）という結果を示した（SA、N=235）。つまり、地域とのつながりという意味では、学生の意識傾向と一致しているのである。

他方、ボランティアが施設に与える悪い影響としては、学生側は「職員がボランティアに時間を取られる」34.0%、「職員がボランティアと利用者の関係に気を使う」29.1%、「職員がボランティアの関係に気を使う」18.2%などという結果であった（「特に悪影響はない」は13.3%、SA、N=203）。しかし、施設側の認識では「特に悪影響はない」51.7%が最も多く、次いで「ボランティアを利用者との関係に気を使う」22.8%、「ボランティアに気を使う」8.2%などという結果であった（SA、N=232）。これについても、特に悪影響を懸念して福祉ボランティア活動に踏み出せない学生に伝えておく必要もあろう。

(3) 参加スタイル・時期と活動日時、謝礼に関する考え方

学生が良いと思う福祉ボランティアの参加スタイルは、「定期的な参加」61.5%、「不定期的な参加（イベントや行事開催時等）」30.2%であった（SA、N=205）。これに関して、施設側の「ボランティアに最も協力を望みたい時期」をみると、「行事開催時」54.9%、「日常的」38.4%の順であった（SA、N=224）。特に「行事開催時」という点では、両者のニーズにある程度の一致点はみられるものの、施設側は日常的に福祉ボランティア活動に来て欲しいと思いやすい反面、学生側は日常的な参加が困難な状況にあることが推測される（なお、学生側が考える「施設にとってありがたいと思われるボランティア」では、「定期的に来てくれる人」が34.3%存在していた）。

次に、学生側が最も希望する福祉ボランティアの活動曜日については、「土曜日」62.9%、「日曜日」28.7%で両者の合計が91.6%となったが、やはり大学の講義等で週末しか時間が取れない状況だと推測される（SA、N=202）。なお、施設側の「ボランティアに最も来て欲しい曜日」では、「土曜日」27.3%、「日曜日」23.6%、「水曜日」14.3%、「金曜日」11.8%の順であった（SA、N=161）。以上の点を踏まえると、週末という部分で両者のニーズは一致しやすい傾向があると考えられるのである。

また、ボランティア活動の交通費に関する考え方としては、学生側はボランティア先までの自己負担可能な交通費の限度額を「500円以内」42.4%、「1000円以内」27.8%、「300円以内」11.7%、「負担なし」9.8%という割合で回答していたが（SA、N=205）、施設側の回答では「交通費を負担して欲しい」52.2%、「無償でよ

い」33.7%、「食事と交通費を負担して欲しい」11.7%などという結果になっていた（SA、N=205）。つまり、学生は一定の交通費を負担することを許容しているが、施設側では交通費を「無償でよい」が33.7%あるものの、全体的には過半数の社会福祉施設が交通費程度を施設が負担してもよいと考えていたのである（つまり、施設側との交通費支給に関する交渉の余地があるとも考えられる）。

4 ボランティアの担当者の必要性・配置と保険に対する意識・状況

学生側にボランティア活動を希望する社会福祉施設等に「専任のボランティア担当者を配置したほうがよいと思うか」と尋ねたところ、「思う」82.0%、「どちらでもよい」13.2%「思わない」4.9%という結果となった（SA、N=205）。これに関して、施設側の78%（245施設中191施設）が既にボランティア担当者を配置しており、担当者数は「1名」63.9%、「2名」23.6%という状況がみられた（SA、N=191）。この担当者の主な職種（専任ではないボランティア担当者も含む）をみてみると、「生活相談員・支援員」59.6%が最も多く、次いで「施設長」「事務職員」9.8%の順であった（SA、N=193）。担当者の資格・研修状況については、多いものから「介護福祉士」35.1%、「社会福祉士」19.1%、「ホームヘルパー」14.9%、「ボランティアコーディネーター」9.6%などという状況（選択肢の「その他」を除く）であった（MA、N=188）。つまり、この結果からケアワーカーやソーシャルワーカーの役割を持つ者がボランティアを担当しやすいことが推察されるのである。しかし、「ボランティアコーディネーター」が9.6%に留まっていることから、

施設側もボランティア担当者の資質向上への取り組みが必要であるとも考えられる。

一方、ボランティア保険への加入については、調査対象となった学生自身は大学で加入しているが、施設側では「必要に応じて」38.3%が最も多く、次いで「加入させていない」29.7%、「加入させている」23.0%という状況であった（SA、N=222）。この結果からは、ボランティアを活動上のリスクから回避させるためにも、施設側も配慮しなければならない重要な事柄になると考えられる。

V まとめ

1. 調査結果の整理

以上の結果を踏まえて、大学（教員）が福祉ボランティア活動を希望する学生に対する支援すべき内容を①福祉ボランティア活動を志す学生に伝えるべきこと、②支援側（大学・教員）が考える必要があると思われること（体制に関すること）、③その他、に分類すると、次のように整理できよう。

- ① 福祉ボランティア活動を志す学生に伝えるべきこと、
 - ・「高齢者関連施設」においては、学生側の関心も高く、実際に施設数も多くなりやすいことから、意欲があれば比較的取り組みやすい活動分野であること。
 - ・学生が最も取り組みたい活動と施設側のボランティアに期待する役割は、一致（話し合い手・コミュニケーションとイベント行事への参加という点で）しやすいこと。
 - ・施設側は専門性よりもマナーを求めている、「明るさ」、「積極性」、「まじめさ」を心がける事が重要であること。

- ・施設側が望むボランティアは、「利用者とのコミュニケーションがスムーズにできて、定期的に来てくれるような人」という傾向があること。
 - ・ボランティアと利用者、職員とのトラブルは、学生が考えるほど生じていないこと。
 - ・福祉ボランティア活動は、学生だけにメリットがあるのではなく、施設の利用者にとってもいい刺激を与えていること。
 - ・学生側の約30%が「施設職員はボランティアを受け入れることで時間を取られたり、施設利用者とボランティアの関係に気を使っている」と感じているが、多くの施設は負担があるとは受け止めていないこと。
 - ・学生と施設のボランティア活動の希望曜日は土曜と日曜で（週末）部分で一致しやすい傾向があること。
 - ・施設の82%は実際に専任のボランティア担当者を配置（1名配置が約64%）していること。（多くの学生が施設への担当者配置を希望していた）
- ② 支援側（大学・教員）が考える必要があると思われること（体制に関すること）
- ・学生側と施設側の意向がマッチングできるような支援を考える必要性があること。
 - ・施設の行事開催に伴うボランティア募集活動の情報を整理し、大学を通じて学生に提供できる体制をとることを検討すべきこと。
- ③ その他
- ・福祉ボランティアを支援する場合、交通費に関して施設との交渉の余地を検討すること。（だれが交渉すべきか、も考える必要がある。なお、回答者全体の6割以上は、施設側が交通費程度を負担してもよいと考えていた）
 - ・施設のボランティアコーディネーター担当者の

学習機会の整備を働きかけること

※施設側のボランティア担当者の多く(90%以上)は、ボランティアのコーディネート方法などの専門的研修は受講していないことがある。

- ・施設側の福祉ボランティア活動者に対するボランティア保険加入を検討する必要性があること
（施設側に加えて、大学や教員等もボランティア活動保険 [例：社会福祉協議会等] への加入を推奨・確認する必要があるのではないかと。また、ボランティア活動者自身もリスクを認識し、必要に応じて自ら負担して加入する必要があるのではないかと。保険加入費用の負担者は、施設か学生 [ボランティア活動者] に関わらず、ボランティア支援における確認事項の1つであろう。）

2. まとめ

近年、教育機関において体験学習としての福祉ボランティア活動も実施されている。特に本調査結果からは、学生と社会福祉施設間の認識の違いを把握し、その違いを両者が埋めていくことのできるような大学側からのアプローチの方法を整えていく必要性が考えられた。本論文での調査対象者としては、福岡県立大学の社会福祉学科の学生を設定したものの、他の大学においても社会福祉施設と福祉を学ぶ学生の認識が一致していない状況が存在する可能性も推測された（本研究では地域が限定されやすい部分もあったが）。

今回の主な研究結果としては、既述したように(1)福祉ボランティアを希望する学生は、マナーや基本的礼儀を身に付ける必要があること（大学でも支援すべき事柄であろう。また、高

い専門性は要求されていないと考えられた)、(2)学生・施設とも福祉ボランティアを通じて利用者とのコミュニケーションを促進させたいこと(学生自身はコミュニケーションに不安を抱えやすい反面、それを望んでいた)、(3)社会福祉施設側は、ボランティアの要望を踏まえてボランティア担当者の資質を向上させるとともに、リスクに備える体制整備を図ること、(4)福祉ボランティアには、施設と地域の関わりを促進させる働きが期待されていること、などが抽出されてきた。総じて、社会福祉施設側もボランティアに期待する部分が大きく、否定的な感情は持っていないことから、今後は本研究で明らかにした施設と学生のギャップを踏まえて、学生が主体的に福祉ボランティア活動に取り組めるような支援を大学・教員側も考える必要があるといえる。

なお、調査対象となった社会福祉施設の地域の概要・特性を紹介する必要性も考えられたが、紙幅の都合上割愛させて頂いた。

注

1) 2006年度の福岡県立大学社会福祉学科学生の社会福祉援助技術現場実習の実習効果意識の変化について、実習前後に同じ質問項目でアンケート調査を実施した。比較検討した結果、専門職意識等が実習後に有意に高まっており、実習意義を認識していた。しかし、実習先の違いによる実習内容の隔たり(施設によっては、介護・保育等が主となった実習もある)や相談援助の見学や実施が困難になりやすいことも課題として明らかになっている。(参考文献：本郷秀和・松岡佐智「社会福祉援助技術現場実習における実習効果意識に関する一考察」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』第15巻第2号、福岡県立大学、平成19年3月。)

- 2) ボランティア活動の6つの性格は、中島充洋著、『ボランティア論 ―共生の社会づくりを目指して―』、中央法規、1999年、pp18-22を参照した。
- 3) 三本松政之「第1章 福祉ボランティアになるということ」、三本松政之・朝倉美江編『福祉ボランティア論』、有斐閣アルマ、2007年、p.17。
- 4) 守本友美、「第12章 グループ討議」、岡本栄一監修、守本友美・河内昌彦・立石宏昭編著、『ボランティア活動のすすめ』、ミネルヴァ書房、2005年、p.206を参考。
- 5) 佐々木正道、「第6章 大学生のボランティア活動と受け入れ施設・団体の対応に関する意識と実態」『大学生とボランティアに関する実証的研究』、ミネルヴァ書房、2003年、p.242。
- 6) 前掲3)、p.236。

参考文献

- ・日本福祉教育・ボランティア学習学会機関紙編集委員会、『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 Vol7. 2002. ボランティアネットワークと大学の変容の可能性』、万葉舎、2002年。
- ・佐々木正道編著、『大学生とボランティアに関する実証的研究』、ミネルヴァ書房、2003年。
- ・中島充洋、『ボランティア論 ―共生の社会づくりを目指して―』、中央法規、1999年。
- ・岡本栄一監修、守本友美・河内昌彦・立石宏昭編著、『ボランティア活動のすすめ』、ミネルヴァ書房、2005年。
- ・三本松政之・朝倉美江編『福祉ボランティア論』、有斐閣アルマ、2007年。
- ・雨宮孝子・小谷直道・和田俊明編著、『福祉キーワードシリーズ ボランティア・NPO』、中央法規、2002年。
- ・福岡県立大学人間社会学部社会福祉学科・経験型実習研究グループ〔研究代表：本郷秀和〕(発行)、「福祉ボランティアを通じた経験型実習導入の可能性 ―

北九州・筑豊地域の社会福祉施設における学生ボランティア受け入れに関する実態調査を基礎として一」、2008年.

- ・福岡県立大学人間社会学部社会福祉学科・経験型実習研究グループ [研究代表：本郷秀和]、「福祉ボランティアを通じた経験型実習導入の可能性Ⅱ」、福岡県立大学生涯福祉研究センター発行、2008年.